新型コロナ　後遺症の頭痛は諦めず治療を

2021.5.29 毎日新聞 工藤千秋・くどうちあき脳神経外科クリニック院長

新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下、新型コロナ）の第4波は、変異株のまん延により各地で過去最多の感染者数を記録しています。そして今後、この感染が収束したとしても実は悩ましい問題が残されます。それは後遺症に苦しむ人の増加です。

一般に感染症では血液中からウイルスが検出されなくなったウイルス陰性化をもって治癒、つまり治ったということになりますが、新型コロナの厄介なところは、ウイルス陰性化後にもさまざま後遺症に悩まされることです。実際、私のクリニックにもPCR検査で陰性化後も断続的に続く後遺症と思われる頭痛を訴える患者さんが時折来院します。

新型コロナの後遺症というと、においが分からなくなる嗅覚障害などが有名です。これに対し頭痛は新型コロナの感染有無にかかわらず、普段から日常にありふれた症状で、かつ嗅覚障害ほど後遺症の典型的症状ではないため、受診で症状を訴えても単純に鎮痛薬を処方されるのみで患者さんの自覚症状が十分に改善していないケースがあるようです。未解明のことも多いのですが、今回は現時点で私がこれに対してどのように対処しているかをお話ししたいと思います。

疲労感、記憶障害、脱毛……多様な後遺症の実態

そもそも新型コロナ後遺症がどのくらいの頻度で起きているかは、報告によってまちまちです。たとえばフランスで感染者120人を対象に行った研究からは、発症から4カ月弱の時点で、5割以上で疲労感、4割強で呼吸困難の訴えがあり、3割前後の人で記憶障害、睡眠障害、集中力低下、2割に脱毛の症状があったと報告されています。

また、新型コロナの流行が最初に確認された中国・湖北省武漢市の金銀潭病院で2020年1～5月に新型コロナで入院した患者1733人を退院後半年間追跡した調査からは、76%の患者で何らかの後遺症があり、主なものとしては、疲労感あるいは筋力低下が63%、睡眠障害が26%、脱毛が22%、嗅覚障害が11%などと報告されています。この調査では頭痛を訴える患者が2%いたこともわかっています。

この数字だけを見れば、頭痛の後遺症が起きるのは感染者の50人に1人で、それほど頻度の多いものではないようです。もっとも報告によってはパーセンテージで1桁後半というデータもありますし、私が診察している印象でも2%よりは頻度が高いのではないかと考えています。

新型コロナ後遺症に見られる四つの病態

さて、新型コロナの後遺症がどのような原因で起きているかは、今のところ完全な解明に至っていません。ただ、英国立衛生研究所（NIHR）では、この後遺症が、●持続する新型コロナの症状●**集中治療後症候群**●**ウイルス感染後疲労症候群**●**肺や心臓の慢性的な障害**――のおおむね四つに分類され、しかもそれらが複雑に絡み合って各種症状につながっていると指摘しています。

このうち集中治療後症候群とは、集中治療室（ICU）在室中や退室後に生じる身体障害、精神障害、認知機能障害です。ウイルス感染後疲労症候群は感染後に疲れやすさ、睡眠障害などが起こるものです。いずれも新型コロナ以前から存在していた病態です。

頭痛の後遺症の背後にサイトカインストームの影響？

これら4種類の病態いずれでも頭痛は起こり得るのですが、その中でも私は「肺や心臓

の慢性的な障害」に着目しています。この病態は「サイトカインストーム」と呼ばれる体内での現象をきっかけに発症していると見られています。

サイトカインは免疫システムの中で働く複数のたんぱく質の総称です。体内に入り込んだウイルスがヒトの細胞に感染すると、そこからサイトカインが分泌されます。サイトカインはウイルスが感染した細胞の存在を免疫システムに知らせ、同時に、感染した細胞で起こる炎症を抑えるよう免疫細胞の一部に働きかけます。いわば体内で発生した異常を知らせるアラームの役割を担っています。

ところが感染が急速に進行すると、サイトカインが嵐（ストーム）のように大量に発生し、血液や血管に異常を起こします。具体的には血液が固まりやすくなり、血栓と呼ばれる血液の塊を作ります。血管の中に血栓ができると、当然のことながら血液の流れが悪くなり、最悪の場合は血液が流れなくなってしまいます。

この現象が心臓の血管で起これば、血液を通して酸素を得ることができなくなったために心臓の筋肉が壊死（えし）する心筋梗塞（こうそく）、脳血管で起これば脳の神経細胞が壊死する脳梗塞となります。いずれも致死的になる危険性が高い疾患です。実際、新型コロナの重症者でも心筋梗塞や脳梗塞に至って残念ながら亡くなってしまう人たちがいます。

私がなぜサイトカインストームによる血管の障害を新型コロナ後遺症の頭痛の原因として疑っているかというと、そうした症状を訴える患者さんでは、感染前に比べ、感染後に血圧が高くなっているケースが少なくなかったからです。そして新型コロナの感染の有無にかかわらず、心筋梗塞や脳梗塞を起こす患者さんでは、それ以前に高血圧症を有しているケースがかなり多いのです。これは長年の生活習慣や糖尿病などで血管に障害が起こり、血液が流れにくくなっているからです。

これらを総合して改めて説明すると、新型コロナの後遺症として頭痛を訴える患者さんでは、画像診断で血管の異常が明確に確認できる脳梗塞やその予備群までには至っていないものの、軽度な血栓や血管の障害が脳血管内で起こって血流が悪くなっている可能性があります。その場合、血流改善のために心臓のポンプ機能が過剰に働いて高血圧となり、高い血圧で強引に血液を流すことで血管が拡張され、それに伴い血管を取り巻く神経も刺激されて頭痛を感じるという見立てが可能なのです。

鎮痛薬と降圧薬の併用が有効

そしてあくまで私の診療経験に過ぎませんが、新型コロナの後遺症で頭痛を訴える患者さんでは単純に通常の消炎鎮痛薬のみを処方しても、患者さんの自覚症状が思うように改善しないことがほとんどです。

ところが、前述のような後遺症の頭痛を訴え、かつ血圧が以前よりも高くなっているケースで消炎鎮痛薬とともに血圧を下げる降圧薬を併用すると、患者さんから「かなり症状が楽になりました」と報告されることが多いのです。

ちなみに降圧薬は、薬の効き方が違う複数のタイプがありますが、私はもっとも一般的に使われているカルシウム拮抗（きっこう）薬と呼ばれるタイプを処方します。この薬は血管を取り巻く血管平滑筋と呼ばれる筋肉を収縮させるカルシウムイオンの働きを抑えます。つまりこの薬を服用すると血管が収縮しにくくなる、引いては血管が広がることで血液の流れが良くなり血圧が下がるのです。

こうした作用のある薬を服用することで後遺症の頭痛が改善傾向を示すという事実も、

私が新型コロナ後遺症の頭痛の原因としてサイトカインストームを疑う理由の一つです。

後遺症専門や頭痛専門の外来で相談を

もっとも、後遺症の頭痛を訴える患者さんの中でも血圧が高くない人もいますので、その場合は通常の消炎鎮痛薬に片頭痛薬を併用するなど、さまざまな治療を試みます。こうした処方の工夫で、劇的とまではいえなくとも一定の症状軽減が認められる場合も少なくありません。

まだまだ解明されていないことが多い新型コロナの後遺症ですが、最近では大学病院などを中心に後遺症専門外来を設置する動きも活発化しています。また、感染者の増加とともに後遺症を訴える患者さんも増加しているので、大手病院以外でも後遺症の診療経験を持つ医療機関は増えてきているはずです。

今回取り上げた後遺症の頭痛に関していえば、近隣で後遺症専門外来を受診できればそれに越したことはありませんが、そうでなくとも、頭痛外来を持つ医療機関や脳神経外科の医療機関などで相談してみることをお勧めします。いずれにせよ諦めず、専門医の指導に従って一歩でも前を目指すことが肝要です。【聞き手＝ジャーナリスト・村上和巳】